



中田國太郎選 投稿数13首

引間豊作選 投稿数26句

朝採りの胡瓜のレットルわが誇り夜明の五時に獲入れ急ぐ 皆野 金子善次郎
 (評) 作者の胡瓜に掛ける心情が「夜明の五時」に集約され表現されているいい歌である。朝露にぬれ、時間と戦いながら真剣に働いている姿が浮ぶ。滅びゆく現在の農業の中では、貴重な存在である。ただ、上の句は、朝五時の胡瓜の瑞瑞しい表情に焦点をあわせて描写した方が、もっと歌が生々として、詩情が深まり、読者の琴線に触れる歌になるのではないかと思う。

花野行き錯覚なりし母の声むなしく澄ます我が耳あわれ 皆野 笠原三江子
 補聴器を付ければ急に鳴りだしぬ庭の風鈴涼風なりて 上日野沢 四方田利男
 きょうよりは午報が曲になるといふを聞くまでと梅雨晴の畑に 三沢 真下 杏子
 台風よ来ないで無事に実つてと祈る気持ちで胡麻を間引きす 皆野 新井 茂
 健やかな曾孫八人宝なる人生の幸絆うれしき 皆野 新井 愛子
 梅雨明けは葉月に入りて猛暑なり蝉の鳴き声侘しく聞こゆ 金崎 山田 雅子
 唄ひつぐ「さとうきび畑」くちずさみ平和を祈る暑き八月 三沢 新井 民子
 旅先の様子を都度を送りくる孫のメールに心ほころぶ 三沢 新井 叶子
 洪水に合し人等は痛手なり一丸となり逃げるほかなし 皆野 塩田 千代
 ひい孫の餅背負わされ仁王立ち驚き眼で尻餅をつく 皆野 吉岡 ヨシ
 大雨後の起き抜けに見る重ね山霧に浮ぶや山稜の美 野巻 町田 忠次
 霧の中香りふりまき山百合の慎ましやかに誰を待つ 野巻 林 武義

※今月号から、短歌の選を再開します。

蜘蛛の糸風が光を追いにけり 下田野 中田 久恵
 (評) この風景は、誰しも見聞き出来るものでなく、たとえ目のあたりにしても、実態を知らなければ見過してしまふ。この天与の摂理を掌中に納めた作者の、極限まで省略した文体に、賞嘆あるのみ。句意の補足を許されるならば、蜘蛛の生活圏での食餌の量は、おそらく決まっているだろう。一箇の卵囊から幾匹の幼虫が湧き出るように生れ、親の近辺に棲めば食糧難で全滅するが、これを避ける為幼虫は、草や木の枝に上り、風を得て尻より、采程の糸を流し、機をみて空中を飛翔して新天地に向う。これがこの句の核になっている。

妻の手を借りて下着を脱ぐ極暑 水引きや小さいけれどりと咲け 下田野沢 植木 豊子
 皆野 新井 茂 待ちくれし客といたたく鰻飯 三沢 真下 杏子
 一匹も掬へぬ金魚貫ひ来し 皆野 大沼シヅ子 友好むブドー酒贈る梅雨晴間 下田野沢 佐藤 清子
 悠長にポピー眺める牧の牛 三沢 石森 勝子 梅干の一つひとつに日の恵み 三沢 新井 叶子
 ぐちいつか夕立雲にほどかるる 下田野 藤原 道男 蟹あそぶ梅雨のしじまの寺苑かな 下田野沢 高山 ユウ
 ひとの来て百合の香知れる家に住みて 三沢 新井 民子 百合咲いてこぼるる花粉の香とも 国神 松岡 千恵
 友逝きぬ燕の低く飛ぶ朝 皆野 桜井 早苗

俳句・短歌を募集
 作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して
 企画課へお寄せください。
 1人1句、1首に限ります。
 8日必着